

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 屋形宗慶

挿絵 みやうちいずみ

序章	遙かなるワイルドウエスト	006
第一章	名高きマーシャルガールズ	010
第二章	淫獄のインプルーヴメント	061
第三章	奈落のデイスグレイス	109
第四章	無間のステイグマ	203
終章	ネバー・エンディング……	261

登場人物紹介

Characters



ヴァージニア・スピツァー

修道服を纏った金髪の美女にして、ショットガンを愛用する凄腕の連邦保安官。

ビアンカ・ブラックタロン

アーリー・エルヴン族の娘。二挺拳銃を使いヴァージニアを補佐する、とんがり耳の相棒。

シャリア

ビアンカたちアーリーとは敵対する、ラター・エルヴン族の女魔道師。

デルマー・サンダース

アロウバーク州知事とフォートハイヴン市長を兼ねる、温厚な初老の紳士。

巨軀の司教は、麗奴の身体を愛玩人形のように弄ぶ。ヴァージニアを丸々覆い隠せうな体格。その巨軀に見合う大きな手ですら、彼女の乳膨を持って余している。申し分ないポリウムのをそれを、マクブライドは執拗に揉み、極薄の聖衣越しの肉感を楽しむ。

「う、うるさ……たま、れえ……」

「女がそのような言葉を使うな！ 男には敬愛と服従の念を以て接しろ！」
極軽く。太い指が破廉恥な聖服の上から膨れた乳輪を撫で、ニプルを爪弾いた。

「くあはあーッ！」

——ゾクゾクゾクッ！ ゾクウッ！

仰け反った。胸の先から走った鮮烈すぎる快感。マクブライドに身体を預け爪先立ちになりながら、弓なりに反り返ってガクガクと腰が振れた。空腰を振る下半身の激しい動きに、性域を辛うじて隠した黒衣の裾がずり上がる。さらに大きく反った身体は腰が突き出され、祭壇下のディークト教徒の群れに秘部を強調する形となった。

（あぁッ！ イクッ！ イッ、きたくう、ないのにいッ！）

「イッ、いい——ッ！ クヒいいッ!!」

喉から絞り出されたような悦の悲鳴は甲高く響く。自慰とは違う絶頂で身体が浮遊感に襲われる。膣が、未だ迎え入れたことのない男根を恋焦がれるようにギュウと締まった。その瞬発的で強い収縮に、プピュッと一飛沫淫液が噴出する。細波のように断続的に何度

も訪れるアクメ。その度に腰がグンッグンッと宙に突き出され、異端の使徒達の目を奪う。

「ク、フフ……見ろよあの様、腰痠撃させてイッてるぜ」

「凄いイキっぷりだ、マ○コがパクパク動いて汁を湧き水みたいに垂れ流してるぞ！」

清純な少女と同等の綺麗な性器。それが淫売のようにヌメリ濡れ、興奮に充血して色合いを濃くした粘膜花が、蜜液をダラダラと滴り落としている。淫蜜をたっぷりと纏わせた妖花が、アクメの余韻にヒクヒクと花弁を震わせていた。

(ああ、イッた……イカされた……。こんなことで……なんで……)

深い自己嫌悪に苛まれながら、絶頂にぐったりと弛緩した身体がずるずると崩れていく。「諸君、始終を見てわかっただろう。この女の淫乱さが。こんな牝豚が聖職者であり……連邦保安官だというのだ。これが！ プラドニアの法の番人だなどというのだ！」

そのままならば尻餅をつきそうな身体を、異端の司教の丸太のような腕が支えて立ち直らせた。そして、片脚を高々と抱え上げてアクメの汁でヌラヌラと濡れ光った女溝を晒す。

——にちゃあ……。

脚が持ち上げられたのにつられて、ぼつてりとした陰唇が口を開いた。陰唇と陰唇との間に糸が引き、膣口からトロトロと汁が零れる。卑猥な花を目にして、信徒達の鼻息は荒くなっていた。

「このような破廉恥な女には仕置きをするべきだと思いますが。いかがですか司教？」

祭壇の袖で祭事に使うものだろう椅子に腰かけた初老の紳士。悠々と始終を眺めていたサンダースが口を挟んだ。その一言は、間違ひなく決定権を持ったものだった。静かだが有無を言わせない語気を含んで放たれた言葉は、マクブライドへの命令といえるものだろう。

「諸君。ディークト神の名の下に、この恥知らずで身のほどを知らぬ女に制裁を加える！」

——オオオ!!

喚声が湧き上がり、神殿を揺らさんばかりに響き渡る。眼下に手薬煉てぐすねを引いて待つ狂信者達の姿。エデンで受けた恥辱には獣じみた感はなかったが、今度は違う。獣欲剥き出しで、牡が待ち構えていた。牝としての本能ともいえる恐怖が湧き上がる。

(お、犯される……犯される……ッ！)

カチカチと奥歯が鳴った。自らの痴態が、男を獣に変えている。はしたなく悦がった自分自身を呪う。せめてもの抵抗にとマクブライドの手を振り解こうと身体を振るが、片脚を抱え上げられた姿では、それも煽情的な動きにしかならない。

「女に肅清を！ 男を思い知らせるのだ！」

「うあぁッ!」

祭壇の上からヴァージニアの肢体が突き落とされた。亡者の群れの中に墮ちる生者のように、艶やかな金髪を靡かせて狂信者の中に落ちる麗奴。猛り狂ったディークトの信徒は、

我先にと肉感的な彼女の身体に群がる。

「ひッ……!! ひいッ!!」

身体の上を這いずる無数の手。絶頂を迎えて間もなく、敏感さを増している女体は、肌を撫で、肉を揉む撫辱にも反応してしまう。それが最も現れるのは、乳膨だった。

(胸……乳が、くるし、い……。なんだよ、これ……)

乳房の内側から圧迫される感覚。胸の先端の疼きに再び火がつき、女体が再度発情しだしているのを感じた。一度イッてもなおぶり返す官能。牝の業を恨みながら、ヴァージニアは狂信者達に微力な抵抗を試みる。

「さわ、るなッ、下衆ども……!! あたしの身体にッ、さわらんじゃねえ……ッ!!」

性感の昂りに高潮した顔で、キッと衆人を睨みつけて精一杯の力でもがき、暴れた。

——ビジィッ! ビリリリ——ッ!!

それが仇となり、身体の上を這う手が暴れる女体を押さえつけようとして掴んだ漆黒の辱衣が、襟元から悲鳴を上げて裂ける。肌が透けてしまいそうな薄絹だ。一度裂けると、それは簡単に裂け目が広がっていき、聖衣は黒いボロ着へと姿を変えていった。

「ええいッ……!! 荷造り用の荒縄を持ってこい!」

暴れる隷嬢に手を焼き、狂信者の一人が声を上げた。ほどなくして、縄を持った信徒が礼拝堂に戻るや、引き裂かれた黒衣で申し訳程度に肌を隠した美隷に縄化粧が施される。

破廉恥な聖衣であったものの名残を纏い、数人に力尽くで体勢を作らされたヴァージニアに、指の太さほどの目の粗い縄がかけられていく。相変わらず椅子に腰かけた黒幕は、ゆつたりとくつろいだ様子で、白い肌的美丽奴が緊縛されていく様を觀賞している。

「クソッ！ クソッ！ 放せッ……放ッ、う、ぐう……きつ、いイ……」

——ギリ、ギリ……。

ささくれ立った荒縄がチクチクと肌を刺激した。脚は折り曲げられて縄を巻かれ、伸ばすことができないうように緊縛されている。その膝に両の手首が括りつけられ、脚は開脚することを強制される形になっていた。一際目を引く胸の大きな肉房は、付け根から絞り出すように縛り上げられ、張り詰めた様子を見せる。緊縛されてもなお、もがいてみるもの、暴れば暴れるほど縄は肌に食い込み自らを責めつけるだけだ。

（胸が、胸が痛い……破裂しそう……ッ！）

まるで匂を迎えた多肉果のように、乳膨はパンパンに張っている。発情した身体は、胸は、品種改良の成果を示すように乳腺を活発に活動させ、その大きなタンクの内に乳汁を溜め込む。そこへ緊縛を受ける苦痛は、まさに乳膨が破裂してしまいうなほどだ。

「へへ……さすがにこうがちりと縛られてちゃ、抵抗する気も起きないみたいだな」

裏返された亀のように身動きの取れない縛隷を見下ろし、狂信者の中から含み笑いが漏れる。見上げる視界に、異端の使徒達の膨らみ上がった股間が飛び込み、ヴァージニアは

眉間に皺を刻んで嫌悪感を包み隠さず露にした。

「フッフッフ……なんて無様で惨めな格好だ、正教の牝豚シスターよ」

美隷は仰向けに転がったその姿態を晒している。破廉恥であろうとも、一応は身体を包み隠す役目をしていた薄絹もいまはもうポロ切れと化し、彼女の淫らな身体を隠すものは何もない。手足はほとんど動かす余地もなく、膨大した恥乳や無毛の恥域を隠すこともままならない状態だ。

「毛がないぞ……？ 剃つてあるのか？」

環視する狂信者の中からポツリと聞こえる声。その言葉に、ヴァージニアの顔が朱を塗ったように真っ赤に染まった。一斉に男達の好奇の視線をパイパンの秘所に感じたからだ。剃ったものか否か。それを探るべく、ツルリと産毛すらもなさそうなほど滑らかな恥丘を観察する無数の目。

「剃ったもんじゃなさそうだ……天然の無毛だな」

「なんだコイツ、見られただけでもうヌルヌルにしているじゃねえか」

嘲笑が所々で聞こえる。隷女を見下ろすすべての者が、羞恥に対して恥知らずにも肉貝からしとどに蜜を垂らす浅ましい女の姿を嘲っていた。無毛故に、厚い肉唇も、その内に孕んだ肉真珠も、サーモンピンクにヌメる粘膜も——すべてが好奇の目に晒されている。女として隠すべき部分を、素性も知れない異教徒達に目で犯されているのだ。悔しさや恥

ずかしさ以上に惨めさが先立ち、ヴァージニアは肩を震わせて唇を噛む。

「では、制裁を下す。咎人を持ち上げるのだ」

巨漢の司教マクブライドが指図する。しばし清水の湧き出る白い恥丘に見入っていた信徒達は従順にそれに従い、拘束されて床に転がったヴァージニアを抱き上げた。無様に開脚した脚の付け根では、無毛の女溝が淫液でヌラヌラと輝き、たらりと糸を引いて肉汁が滴り落ちる。それを目にして思わせぶりにニヤリと笑った異端の聖職者は、節くれ立った指をそこに這わせた。

——にちゃ、にちゃ、にぢゆる……ぬっちやぬっちやぬっちや……。

「はひッ！ いひやあ、やめ、ひぁアッ！」

「散々辱められてもまだ股を濡らすか。牝とは所詮こんなものだな。さあ、まずは男を差し置いて、女如きが保安官という権威ある職に就いた報いを受けよ！」

恥汁の糸を引いて指が離れると、マクブライドはその大きな掌を振りかぶる。

——ピチンッ！

「ヒアぁぁあーッ！」

絞り出される形で緊縛された乳房を、平手打ちが襲う。乳房がその衝撃でブルンと左右に大きく揺れ、張り詰めた肉をきつく縛り上げられたことによる苦痛が増幅されて苦しめる。

——ベチン！ バシッ！ バシンッ！

「ひいイッ!! いいひいーッ！ うくああああーッ!!」

二度三度と、両手で左右から乳房を責める掌。みるみる白磁の肌は赤く染まり、ヴァー
ジニアは苦悶して目を見開き悲鳴を上げた。

「フフフ、どうだ、男への従属をディークト神の名の下に誓うならば許してやるぞ？」
手を休めず、まるでボールで戯れる少年のように丸々とした膨乳を往復に叩くマクブラ
イド。性感が集約されたように敏感な乳を滅多打ちにされ、金髪の乳隷は悶えるままに気
を絶ってしまいそうだった。痛みが快感に変換されているかのように、胸の頂点ではニプ
ルが痛いほどに勃起してツンと突き出している。

それが見逃されるはずもなかった。膨乳へのスパンキングの手を止めた司教は、そのそ
そり勃ったニプルに責めの矛先を向ける。汗ではない液体にしっとりとした大輪の乳暈
と、背の低いニプル。精一杯背伸びして勃ち上がった乳首を、太い指が弾いた。

——ピシン！

「はぐううらうッ！」

大きな面での痛みに代わり、ピンポイントでの鋭い快感が走る。女体が仰け反り、くぐ
もった悦声が上がった。ジンジンと、叩きに叩かれた乳房が痛みと快感がごちゃ混ぜにな
った信号を脳に伝える。酷く胸が熱く、乳首などピクピクと脈動しているような感覚すら

あつた。乳房は最大限に張り、限界まで水を詰め込んだ水袋のようにパンパンだ。

張り裂けるのではないかと思うほどの苦痛に、ヴァージニアは頭を振って悶えた。乳肌を叩かれた痛み、ニプルを弾かれた快感、刺激に活性化した乳腺が張る苦しみ。三つが複雑に絡まり合い、胸の中で結晶化していく。その正体に気づき、金髪の隷嬢はハツとした。「この大きく恥知らずな乳首がいいと見えるな。いい声が出ているぞ」

指で爪弾き、時に膨らんだ乳輪に埋め込むように押し捏ね、また時には摘んで引き伸ばすように引つ張る。

(イヤだ！ それ以上、それ以上弄るなッ！ もう、もう……ッ！ もうッ!!)

絶頂感に似た、或いはそれ以上のものが乳肉の中に湧き上がった。乳膨の中で快感が結晶化したもの。それがいままさに体外に噴出しようとしていた。

——ぶちゅうーッ！　ぶちゅちゅーッ！　びゅちゅちゅーッ！

「あああア——ッ!？」

執拗に刺激を受けたニプルが、こらえきれなくなったように一筋、二筋と白液を迸らせた。細い射線。母乳が、白い軌跡を描いて飛ぶ。乳首を弄っていたマクブライドの手を、黒いローブを、乳白色の液体が染める。

胸の膨らみに溜まりに溜まったものが僅かながらも吐き出され、乳房の張りが多少楽になった気がした。心地よい放出感はまだ続いている。思わずヴァージニアは快悦の溜息を



漏らし、噴き出るがままに任せて人生初めての母乳放出に恍惚となった。

「ほほお！ 母乳か！ そうは見えんが……胎はらの中に子を宿していたか」

「いやいや、そうではないんだマクブライド司教。例の、だよ」

その一言で合点がいったのだろう。異端の司教はニヤついた笑いを口元に浮かべ、手に付着した美隷の初乳を舐め取った。

「ディークトの使徒達よ、女の象徴たる乳房に男をしっかりと覚え込ませよ。この淫猥な女体に男尊を躡けるのだ」

再び床に下ろされたヴァージニアの肉体に、狂信者が群がる。我先にと下半身の着衣を脱ぐ男達。すでにいきり勃つたペニスペニスは強暴なまでに反り返って、礼拝堂の天井に先端を向けていた。露出した性器から放たれる臭気で、一気にその場の空気が変わる。それは一種の興奮剤か麻薬のように、狂信者達の枷を外していくものだった。

「女あ、たつぷり男の尊さを教えてやるぞ……」

緊縛され無様に脚を開いて転がったヴァージニアの腹の上に、一人目の男が跨る。大きく張り出した美隷の乳嶺を左右から持ち上げるように寄り合わせ、深く刻まれた乳肉の合わせ目にペニスをすり寄せた。

「なっ、なにッ……？」

男と肌を重ねた経験のない純潔の女が、パイズリを知るはずもない。下乳に触れた熱い

肉棒。それすらも初めて目にしたものだ。おそらく目で見ていなければ何が触れているのか想像すらできないことだったろう。

乳肉をつつく強張った男根。膨れ上がった亀の頭にも似た赤黒い先端部分を持ち、樹木に絡む鳶のように走る青筋を浮き立たせたグロテスクなシルエット。初めて間近に見るそれは、本当に人間の身体の一部かと疑いを持たせるほどに禍々しい。ヴァージニアはモンスターを目の当たりにしたような引き攣った面持ちで、乳房に感じる忌まわしいペニスの脈動にうつつすらと鳥肌を立たせた。

—— Gumッ、ニムムムッ。

左右の胸が合わされた窮屈な谷間に、硬く反り返ったペニスに割り込む。乳の合間を貫く灼熱の肉棒を感じ取り、ヴァージニアは困惑した。一体何が行われているのか、その行為が示すところを理解できなかったからだ。

「へ、へへ、へ……柔らかいのにプリプリしてたまらねえ」

床の上に転がった女体の上で、男の腰が前後にスライドし始める。それに合わせて乳房の間に挟み込まれたペニスも抜き、挿しを繰り返す。

「あつ、あつ!? なんだ、なんだよッ! 何してんだよオッ!」

乳肌を擦る男の突出部。敏感で性感の鋭い胸は、ペニスとの擦れ合いにも敏感に反応した。何度も擦り合わされるうちに、その摩擦部分からジワジワと快美感が過敏な乳の全体

に広がる。止まっていた母乳の放出が再び始まり、乳膨自身が乳汁で濡れていく。

腰を振るほどに、男はヴァージニアの豊乳が生み出す快感に陶醉する。母乳が溜まっ
か、張り詰めてプリプリとした感触を持った乳膨。寄り合わされた乳で圧死させようと
しているかのような肉圧が、挟み込まれたペニスをギュウギュウと締めた。腰を動かすこ
とに、男根を力一杯握り締められて扱かれているかの如き快感が走る。

「母乳がまた出てきたな。パイズリされて感じてんのか、正教の淫乱教徒が」

罵りながら、乳間愛撫に興じる男の腰遣いが荒くなる。胸の間にヌルヌルとしたぬめり
を感じた。パイズリを楽しむ狂信者の先走りの汁。それがヴァージニアの乳肌とペニスと
の摩擦を滑らかにし、男の快感を飛躍的に高めている。そしてそれは、最高のパイズリ道
具を提供させられている乳隷にとっても同様だった。性感豊かな乳肉を捏ね、肌を刺激す
る男根に、彼女の官能も同調するように昂りを見せていた。

「はああ……はあ、はあつ、あ、ああ……」

（なんで、こんなことが……胸、好き勝手に使われてるのに、気持ち悪く、ない……）

その気分の高揚に合わせて、大輪に大きく盛り上がった乳輪やニプルから時折噴出する
ミルクも少し増えている。胸を寄り合わせる男の手も乳汁で濡れ、母乳が谷間に染み込ん
で先走りの汁とともにパイズリの潤滑に一役買っていた。

——ぬぶッ、にゅぶッ、にゅむぶッ！

「お、おっ、おお、おっ……！ よし、よしッ！ そろそろイクぞ！ う、うーッ……！」

一心不乱に腰を振る信徒が切羽詰まった様子で声を上げる。男の絶頂が近いことは、口で言われるよりも早く胸が感じ取っていた。一際膨れ上がった亀頭が、張り出したカリ首が、乳肌を痛烈に擦り、ヴァージニアにも灼熱感を伴った刺激を与えていたからだ。

男がイクことで何が起こるか、それまで知らないほど初ではない。ペニスから薄汚いザーメンが進ることくらいは知っている。そしていま、吐き出される液体的は自分であることもわかっていた。ゾクリと嫌悪感が湧き上がり、鳥肌が立った。生殖の為の体液とはいえ、愛のないこのような行為にあつてはただの排泄物。小水も同然の汚液を撃ちかけられるかと思うとゾツとした。

「う、うう、うううッ！ やめ、ろオ……！ 汚いもん、出すな……ッ！ 下衆ッ！」

せめてもの拒絶。手も脚も拘束され汚辱をかわす術はない。唯一抵抗の意思を示すことができるのは、口だけだった。皮肉屋の彼女も、こんな時には気の利いた言葉が出ないのか、ありきたりな雑言を吐き捨てるばかりだ。

「コイツッ！ わかってないみたいだな、自分の立場が！ いいかッ……！」

深い胸の肉合いから、ペニスが抜き取られるや否や、間髪入れずペニスが爆ぜた。充血して赤黒く膨れた亀頭の先端から、その赤黒さとは裏腹な白い汚液が噴出する。

——ブビュルッ！ ビュッ！ ビュッ！ ビュバッ！

「おうッ！ うっうーッ……！！ 女はア……種汁貰って悦んでりゃいいんだよ！」

白液を噴出し始めたペニスに扱きを入れ、男はヴァージニアの快感と汚辱に歪む美貌に向けてザーメンを撃ち出す。液というよりは、液化しかかった固形物と言った方がいいだろう。重ったるい精液は、さほど宙を飛ぶことなく金髪的美隼に飛びかかる。

「うあッ！ イヤッ、うああうッ！」

——ビチッ！ ベチャッ！！ ベチヨチヨッ！

顔に貼りつく汚液の生々しい感触。へばりついた体液から放たれる異臭が鼻を衝く。ズルズルと肌の上をスライムのように垂れ落ちてきたザーメンが唇を撫で、ヴァージニアはそのおぞましい感覚に緊縛された身体を戦慄させた。

「ククク……では諸君、どんどんヤレ。順番を待つ必要はない」

「へ、へへ、司教様、犯してしまってもよろしいので？」

その問いに、マクブライドは祭壇上のサンダースを見る。柔和な笑顔の紳士は黙って首を横に振った。そのうえで、言葉は出さないまま唇だけ動かし何かを指図する。その内容を覚ったのだろう。異端の司教はいやらしい笑いを見せて教徒達に伝えた。

「この女を犯してはならない。だが、サンダース様のありがたい御配慮により、尻の穴を使うことが許された。存分に可愛がってやるがいい」

「な、な、な……!!? おいッ、馬鹿な、馬鹿なこと言うなッ！ ふざけんなアッ!!」

恰幅のいい司教の声はよく通る大きな声だ。当然ヴァージニアの耳でも後門開放の宣言はしっかりと聞き取れた。処女は守られながらも、ともすれば処女を散らすよりも酷な肛姦を容認する旨を突きつけられたのだ。

行為がアナルセックスに飛躍するとは予想だにできなかった。性器ではない穴を使って交歓するセックスがあることは知っていたが、それを処女の喪失以前に我が身で体験することになるとは。

無防備に晒された菊門に、狂信者達の視線が集まっているのを感じる。淫穴から滴る蜜に、薄い褐色の窄まりもまたヌメリを帯びていた。放射状に刻まれた皺の一つ一つにも淫液が染み渡り、時折ヒクつきギュウと締まるその様は、何か生物が息づいているようにすら見える。排泄の穴を隠すこともままならず、視線が注がれる恥辱。ヴァージニアはたまらず腰を振り、身悶えた。

「ハハハ！ お、俺が最初だッ！」

その声を皮切りに、我先にと群がった男達が肛穴の争奪戦を始める。そして、ヴァージニアの後穴処女を強奪する権利を得たのは、力で他の信者を押し退けた巨漢だった。脂汗を流すガマガエルのような、でっぷりと贅肉のついた若い男だ。へらへらと気味の悪い笑いを絶えず浮かべた肥満男は、鼻息も荒く美体の麗奴に肌を寄せた。

「うへっ、うえへへッ！ だ、大丈夫だよ。た、たくさん気持ちよくしてあげるから」

「お、おいコラ、てめえ、や、やめろよ……殺すぞ、殺すぞ豚野郎ッ！」

オークの血でも混ざっているかのような醜い男の容貌、太りに太った身体、離れていても漂ってくるキツイ体臭。どれ一つ取っても嘔吐感すら伴う嫌悪が湧き上がった。激しい拒絶の念に任せて罵声を浴びせかけ、殺意混じりの視線で醜男を射る。よりによってこんな男に尻を犯されるなど、最悪の汚辱だ。たとえ無駄でも抵抗せずにいられなかつた。

「ええへへッ！ えへっえっへへ！ イイ、イイよオ！ その顔、その態度、その反抗的な目！ そういう生意気な女を泣き喚かせるのがとつてもイイんだよオ！」

やはり狂信者だ。この男に限らず、ここにいる男は女を虐げること悦びを感じる者ばかりなのだろう。ヴァージニアが反抗し、無駄な抵抗を見せるほどに、ディークトの信徒達の興奮は高まっているように感じられる。

周囲から注がれる蔑み、抵抗する様を眺めて楽しむ視線。ここは地獄だ——無力でただされるままに陵辱される我が身の惨めさに、美隷はギリギリと奥歯を噛み締める。

「スケベな汁でもうケツの穴までデロデロに濡れてるからこのままで大丈夫だよねえ。僕のチンポでたっぷりケツマ○コを慣らしてあげるからね、いいひっ！」

肥肉男に向けるヴァージニアの目に包茎のペニスが映った。黒々とした包皮に包まれたそれは、他の狂信者達のものとは比べてもかなり大きいものだ。醜男はペニスに指を添えて摘むと、手を付け根に向けて動かした。ペロリと包皮が裏返るようにして剥き上げられ、

赤紫に充血した亀頭が露出する。

「——ッ!! っ、イヤだッ!! そんな汚いもの入れるなアッ! あああああーッ!!」

叫び、激しく身体を揺さぶり、全身で拒絶した。麗奴が目にした肥満男のペニスは、白く固まった恥垢が所々に貼りつき、不潔このうえない。包皮を剥いた瞬間にツンと腐臭にも似た悪臭が彼女の鼻腔を襲い、気が遠退く思いだった。

「どうせ汚い穴なんだからさあ、チンポで穿って奥まで磨いてあげるよ、ぶふふッ!」
ブッ、と唾を肉棒に吐きかけ、それを指で塗り伸ばす。そして、前戯もないままヴァー
ジニアの薄褐色の窄まりに亀頭があてがわれた。

「ひいッ!! ヤだ、やめろッ、やめろよ、ああああーッ!! そんなもの入らなッ……!
入ってくるなあーッ!! あッ、がッ、あぐッ!! ああーッ!!」

——グブリ、ズ、ブブ、ブブリユ……。

豚男は彼女の両膝を押さえてより大きく開脚させながら、野太い男根を肛穴に捻じ込んでいく。前戯も施されず、ほぐれていない肛門はその進入を硬く窄まって拒む。だが、ヴァー
ジニア自身の恥汁と醜男の唾液による滑りが、その抵抗も無にして肛穴に不潔なペニ
スの侵入を許してしまう。

「あ、ああッあ! あうおオウッ!! あおおおおーッ!」

——ずぶりゅうーッ!!

先端が肛門の口を開くと、あとは力尽くで一気に串刺しにされた。排出しか経験したことの無い穴に、初めて侵入した異物は、その大きな存在感を以てヴァージニアを苦しめる。

(は、は、入っ……!!? 中にイッ! 広がっ……!! あたし、侵され、てっ……!!)

肛門を刺し貫くものの存在に戦きながら、縄化粧も艶やかな美麗奴は玉の汗を掻き背筋を反らせた。ぷしゅ、ぷしゅと音を立てて胸の先から母乳が断続的に噴き、ヴァージニア自身の顔にまでも降り注ぐ。

「動くよオ! 動くよ動くよ動くよーッ! えへっへっへへへッ!!」

——ズボリユッ! グボボッ! ブボッ! ブボボッ! ズボブッ! ズボッ!

「あぎひやあああああ——ッ!? うごッ、うごッ、うごかッ……うごかなッイッギ!!」
肛門の粘膜が肥肉男のペニスに擦られ熱くなった。肛穴の中を笠の広がったカリ溝が引っ掻き、激しい摩擦刺激が不浄の肉穴から脳天に駆け上がる。ガチガチの勃起棒が根元まで突き入れられ、穴の奥をドツドツと打つ。その度に頭の中で白い火花が飛び、麗奴はビクンビクンと肢体を跳ねさせた。

「どうした使徒諸君。尻だけが使える部分ではないだろう。この女は特に乳輪と乳首の感度がすこぶるいい様子だった。そこに、男の味を教えてやりたまえ」

マクブライドの指図に、肛姦に見入っていたディークト教徒は昂った獣欲の捌け口を求めて肛門串刺し責めに悶えのたうつ女体に群がる。

「そらそら、どうだ、イヤらしい乳首を磨かれる気分はア？」

六、七本はあるだろうか。信徒達のペニスヴァージニアの胸の先に集っていた。膨らんで艶々とテカる乳輪に、その上でそり勃った乳首に、様々な色形の肉棒が砥石で刃物を研ぐかのように擦りつけられている。

濃い桃色の大乳輪の、肌とはまた違った摩擦感。ツルツルとした乳暈と鈴口とが擦れ合う、棘のないマイルドな快感。ドーム状に膨れた大輪の乳暈を擦り立てる無数の亀頭が感じるその快美感は、柔らかい快感故に、じつくりと男達に愉楽を味わわせた。

クリトリスにも勝るとも劣らない性感の集中部を、ペニスが撫で回し、擦り磨く。亀頭が動く度に恥ずかしい乳暈から発せられる痺れるように熱い官能。男達を感じるやんわりとした快感とは逆に、ヴァージニアが乳首一帯に受ける快悦は鮮烈だった。擦られるほどに快感は深まり、それに比例してジンジンと乳腺が疼きだすのを覚える。ニプルから溢れ始めた乳汁と、男達の鈴口から滲み出す先走りの汁が次第に混ざり合さり、白く濁った混合液がクチャクチャと音を立て始める。二種の体液に塗れて、乳輪の上を蠢く亀頭の様相は、さながら無数のナメクジが舐めき這いずっているかのようだ。

「あああああッ！ おあッ！ あおおおんッ、おおおんッ!! うぶぐッ!?」

捌け口を求めた一本のペニスが、悦の喘ぎと苦悶の呻きが渾然一体となった声を上げる。美唇を割り、口内に入り込んだ。もし抵抗心が燃えている時ならば、口に侵入したそれを

嘸み切りもしたかもしれない。しかし、いまの彼女にそんな反抗の余力はなかった。

処女の肉体を責める甘美で無慈悲な快感と苦痛。その苦痛ですらも、強大な快感に取り込まれ官能の一部となりだしていた。摩擦に焼き切れそうな肛穴も、ペニスに奥の奥まで抉り返されるほどに淫悦を燃え上がらせ、処女腔から淫汁がプチュプチュと飛沫を飛ばす。

体内で暴れ狂う快楽の嵐。抵抗の意志も官能に溶け出し、肉欲を享受する意識が芽生えだす。それは、抗い続けられ壊れてしまう理性と自我を守ろうとする、本能的な自衛処理だったのかもしれない。

(尻がッ、胸の先つちよが、熱いッ!! 熱くて狂いそうだ、狂ううーッ!!)

劣情の昇華は止まることを知らず、処女奴隷を狂わせる。無垢な腔が存在しないペニスを締めつけるようにギューンギューンと締めり上がった。子宮が切ない疼きを発し、全身が強張る。それが、迫りくるエクスタシーの極致の前触れであることを、ヴァージニアは覺つた。

彼女は何も意識はしていなかっただろう。しかし、ペニスに刺し貫かれる身体が刺激の inputs に反応し、肛穴を引き締めていた。官能が高まるにつれて、肛門括約筋の縮動は強くなっていく。肛門がギリギリと締めり、男根を千切りそうな強さで締め扱いた。異常な昂奮に鋼のように硬直した男根の持ち主は、そのキツイ扱きに一層狂喜し、鋭角に腰を突き入れて肛内粘膜に龟头部を擦りつけた。

「えひははあーッ！ 締まる！ ケツマ○コ締まるよヒヒヒ！ 僕の精子がそんなに欲しいんだねえ!? いいよいいよ！ 出すよ、僕の汁でケツの中真っ白になれえええッ!!」

——ドクククッ!! どびゅッ、どびゅッ、ドピッ! ブビビッ! ぶびゅーッ!

「んぐぶッ!? ンぶふぐうううううううーッ!?」
肛内に溶かした蠟を流し込まれたのかと錯覚した。それほどに熱いスペルマが尻の中に撃ち出され、直腸粘膜を焼く。いつまでも止まらない射精で、肛内には大量の精液を溜め込まれていく。

(イイあああッ!! イイッ! イクッ! イイーッ! イクイクイクッ! ——ッ!!)

——ぶびゅーッ! ぶしゅッ! ぶびゅーッ! ぶぢゅーッ! びゅつびゅー!!
肛姦射精を引鉄に、一気にアクメが襲った。フッと一瞬白目が剥かれ、気が遠退く。そして、魂まで抜け出てしまいうような素晴らしい解放感が胸を始めに全身に波及する。ニプルの先端から、大輪の乳暈から。濃厚な白色の乳汁が高々と噴き上がり、さながら射精の如く母乳を撒き散らした。

「ハハハ! 母乳噴いてイッてるぞ!」

「うっ、ぐ。う、おお……ッ! 出る……ッ! 飲めよッ!」

「へへっ、へっ、こつちもイクぞッ! おっおおっ、おーッ!」

——びゅーッ! びゅーッ! びゅーッ! びゅーッ! びゅーッ!

(ピアンカ……何してんだ、そんな真似やめろよ……)

奴隷牧場で見た無恥な奴隷と、エルヴンの親友の姿が重なった。自らの身体を慰み、一心に快楽を貪る。ピアンカの姿をした別人かと思いたくなるその光景から、ヴァージニアは目を背けた。なぜ、あの天真爛漫な少女がこんな哀れな牝畜と化さねばならないのか。この身を弄び、いやらしい肉塊へと変異させた女魔道師を、理不尽に自分達を貶めたサンダースを、その念だけで呪殺できそうなほどに深く呪う。

舞台上の牝畜の気持ちとは裏腹に、それを観賞する観客のテンションは上がる一方だった。煽るような、狼の群れの遠吠えを思わせる歓声。嘲るような笑い声。彼女達が見せる痴態が、観客達には最高のアトラクションなのだろう。次のイベントを待ちかねた観客が、ブーイングにも似た声でサンダースに進行を促していた。

「皆様もう待ちきれない御様子ですので、早速次へ参りましょうかねえ」

その身振り手振り、大げさな口調。どれを取っても道化師。紳士を装う狂った道化師は、このコロシアムにいる人間にも狂気を振り撒く扇動者だ。彼の一言一言が、この淫虐の舞台を取り巻く人々を常軌を逸脱した興奮へ誘う。

「では、続きましてのショーに欠かせないゲストを御紹介いたしましょう！」

狂人が示す、ステージの左袖。すべての視線がそこへ向く。

——ブキッ、ブキキッ！ ブフッ、ブフフッ！

幕が開き、男に手綱を取られた畜生が姿を見せた。気だるげに首を動かして騒がしいその方向を見やる。丸々とした身体。短く太い脚。そして、垂れ下がった耳に潰れた鼻——。
(ぶ、豚……?)

その視線に捉えた動物を目にして、ゾワッと身の毛がよだつた。

牛の次は豚——。また授乳させられるかと、胸の尖りに先程のおぞましくも快感底知れない感覚が甦る。

「我輩所有の牧場で育てられた豚ア！ 丁度いま、血気盛んな時期を迎えております！」
サンダースのナレーションを受けた卑しい獣は、手綱を引いて押さえる裏方の男も大変なほどに息巻いていた。いまにも手綱を引き千切つて暴走しそうな気の荒さを見せている。男に制されながら、ゆつくりとステージ中央に進み出た豚。そこにいる二人の牝畜に興味を示してか、蹄でガリガリと床を搔き、女体に襲いかかるうかという素振りを見せた。

(な、なんだこいつ……、豚のくせに人でも食い殺しそうな目しやがって……)

発情収まらず、全身が火照りに汗ばんだ身体をゆつくりと起こしたヴァージニア。二、三步ほど離れたところまで寄つた醜い畜生に恐れを感じる。飢えた狼でも見せないような、狂乱の色をした目がギロリと向いたからだ。

「牡豚がどちらの牝を選ぶかア!? 家畜の交尾をとくと御覧ください！」

地面が揺れるような大歓声が沸き上がった。それに合わせて男達が数人、舞台袖からス

テージに駆け出す。シヨ一の助手だろう男達は、二人の畜女の身体を頭を突き合わせるような格好で組み伏せた。

「こっ、交尾ッ……!!? 交尾って……!!」

脳天を砕石鎚で殴り飛ばされたような衝撃に、頭の中で思考がグルグルと渦巻く。

（豚と交尾……セックスさせる気なのか!? 人間だぞ!? 人間と豚がなんでそんなことさせられる!! なんてそんなことさせられなくちゃいけねえんだ!!）

自らの巨大な胸をクッシヨンのようにして上半身を伏せ、ぶりぶりと肉ぢき、腸詰のような張りを見せる尻を突き出す姿。男達の手によってそのような格好に取り押さえられた牝畜は、頭頂を隔てて対称に同じ姿を取ったピアンカとともに、牡豚の選択を待たされた。

——フゴッ、フゴッ! ブフッ! ブフー!

（ううう……!! 鼻息がッ……!! うあああッ! 鼻ッ、鼻があたるッ!）

豚の特徴的な鼻が、ヴァージニアの女溝を嗅ぐ。荒く生暖かい鼻息が、粘液でねろねろに濡れながらもピタリと閉じた肉合いを刺激する。処女の匂いがするのか。牡豚は嗅ぐだけに止まらず、鼻先で肉の合わせ目を抉じ開け、処女膜の匂いまでも直に嗅ごうかという仕草を見せた。

ニルニルと、粘液で滑る豚鼻が肉花の芯を穿るように何度となく押し込まれる。さすがに鼻が膣口を割って入るようなことはなかった。だが陰唇は執拗に擦り立てられ、ヴ

「アージニアは荒い息遣いを直接陰部に感じてゾワリと鳥肌を立てる。だが、
「おおや？ どうやら六号はお気に召さなかったかア!? この豚め、実はエルヴンフェチ
だったのかもしれないア！ クヒヤーヒヤッハハハッハハハッ!!」

不意に、牡豚は濡れそぼつ肉唇から鼻を離した。それを目にした狂える司会者の巧みな
文句に釣られるように、ドッと笑い声が巻き起こる。その声に驚いたのか、ヒューマンの
畜女の卑液で鼻をグチャグチャに濡らした卑しい動物は、飛び退くようにヴァージニアの
身体から駆けて離れた。

一体目の牝を離れた豚は、もう一体の牝畜の卑猥なフェロモンを嗅ぎつけたのだろう。
すぐさま褐色の肌も艶やかな少女の周りで忙しく鼻を鳴らし始める。

「あ、あ、あはッ……。豚さん、豚さん。フフフ……」

ココア色の肢体にすり寄り、肌を舐めるように鼻先を滑らせる牡豚。ヴァージニアの牝
穴で塗りつけた恥液が、小麦色の肌にナメクジの這ったような跡をつける。小さく引き締
まった尻の曲線をなぞるように動いたあと、下劣な獣の潰れた鼻は、その先の恥域へと迷
わず進む。黒糖の結晶に蜂蜜を垂らしたように淫液にヌメった女裂を、豚の鼻先が掻き分
けて牝の香りを嗅ぐ。

「あ、あぁう、くふん……。や、あぁん、豚さん、鼻、ヌルヌルう……」

愉悦に、鼻孔から鼻輪をぶら下げた家畜少女の顔が緩む。そして浅ましく、卑しい動物

を誘惑するように尻をくねらせた。そのような意図はなかったのかもしれない。ただ、豚の鼻に恥裂を擦りつけようと動いただけだったかもしれない。しかしそれは、牝の蒸れた臭気をたっぷりと嗅ぎ、発情を極めた牡豚には、交尾を求める動きそのものにしか認識できなかつただろう。

——ブキィッ！ ブキッ！ ブキキキィーッ！！

小柄なピアンカの身体を腹の下に隠すように、牡豚の巨体が覆い被さる。

「ひッ、ヒィッ!？」

二度、豚が腰を突き出すのに合わせてツルリツルリと細いものが女穴を浅く穿った。その刺激に褐色の牝畜は音の飛んだ笛のような声を上げる。その細いものこそが牡豚の生殖器であるとは気づかない。何をされているのかもわからない状況。困惑する中での三度目、細い生殖器がアーリー・エルヴンの膣内に入り込んだ。

「はぁッ、はぁッ！ くすぐりたい、くすぐりたいよォー！ あ、は、あッ……！」

指ほどの太さしかないそれは、快感らしい快感を牝畜に与えなかった。時折、膣内でも感度の高いスポットを擦りあてて心地いいことはあったものの、せいぜい指戯程度の刺激しか得られない。こそばゆい程度の快感に焦れつたさを感じ始めていた褐色の畜女を、突然、思わぬ責めが襲った。

——グリユ、グリユグリユ、グブブ、ズグブ、グリユブ……。

「ひいひいイッ!? あ! ハ! ふぐうううう!! な、なにひい!? おなかにイ!!」
未知の感覚に、ビアンカは大きな瞳を見開いた。詰まったように数度息を切らせ、桜貝のような舌を宙に突き出して悶える。

膣の奥を何度か探るようにつついた豚のペニスが、狙いすましたように子宮口を貫いたのだ。あまりに唐突な、未到地への異物の侵入。小さな貫通だが、その衝撃はまるで胎が貫かれたような錯覚を覚えさせた。

子宮に入り込んだ螺旋状の性器の先端が膨らみ、狭い頸口をガッチリと捉えている。女の秘宮を塞ぐようにしてペニスがロックされると、発情した牡豚は腰の動きを急に緩慢なものにした。

ゆるゆるとした動きで豚の腰が動く。それに合わせて、先端の膨らんだペニスがガッチリと捉えた子宮口を捏ねた。初めてのその感覚は、驚くほどに甘美な刺激をビアンカにもたらず。胎の奥をマッサージされる快感は、身の毛が逆立つほどの快感を巻き起こした。

「あ、あ、あ……」

言葉にならない。ヴァージニアの目の前で折り重なった少女と醜悪な牡豚が、臆面なく繰り広げる交尾――。親友であったその牝畜生は、鼻孔から下げた鼻輪を揺らし、自ら家畜に対して尻をすり寄せている節すら見える。悦楽に退廃的な笑みを浮かべ、牡豚に負けず劣らずだらしなく涎を垂れ流すその様は、絶望的なまでに卑しかった。

——ブシユシユシユシユツ！　ブシユシユシユツ！　ブシユルルルツ！

「ヒヤあああああーッ!?　オナカに、何かッ、何か出てるッ！　出、てええ——ッ!!」

卑しい生き物によってポルチオの性感に目覚め始め、その官能に恍惚となっている牝畜を再度未知の衝撃が襲う。下等な生物の精液が、子宮に吐き出され始めたのだ。

胎の中でビチャビチャと渦巻く汚液。人のそれとは違う、長く時間をかけた射精。放出される度にペニスの先端が膨らみ、子宮口を心地よく責めた。始め水のようなだった精液は時間とともに濃く、粘度を増し、豚の精子をたんまりと含んだ粘液がエルヴンの子宮を埋め尽くす。

「お、あ……おお、ぐ……くる、し……」

長い時間をかけて子宮に詰め込まれた汚液に、下腹が張る。重苦しさに悶えながらも、ビアンカは子壺に染みる濃い牡のエキスに悦楽を得ていた。懸命に種を残そうとする牡豚に、愛しさすら覚えていたかもしれない。

やがて、豚のペニスからはゼリーか膠にかわのような濃いものが溢れる。それが精液を詰め込んだ子宮の口を塞ぎ、長い交尾はやつと終わった。下腹部に感じる多量の液体を溜め込んだ胎の張り。その苦しさと張りそのものが快感となり、小柄な牝畜生は悦に浸る。

豚種つけを好奇と変態的な劣情を持って静かに見詰めていた観客達が、我に返ったように歓声を上げた。静まり返っていたコロシラムが、瞬時に下卑た歓声と笑声で包まれる。

(ビアンカ……。なんてこと……。お前……)

もう途中からは見るに堪えなかった。顔を背けて目も閉じ、心の中で絶叫を張り上げて声も音も断とうとすらしめた。しかし男達に組み伏せられたまま、最もビアンカの声がダイレクトに耳に入る場所で、異生物姦によがるその声を聞かされた。親友の墮落した様に、ヴァージニアは失意を隠しきれない。姿ばかりか、心までも変異した親友は痛嘆を通り越して失望すらも抱かせる。

「いかがでしたかな？　なんとまだ足りない!?　なるほど、豚程度では物足りない!?」
同意と取れるざわめきがコロシウムに広がった。それは、サンダースのシナリオ通りの展開だったのだろう。すぐさま、司会進行する老境の男はつき従ったラター・エルヴンの魔女に小さく指図した。観衆がざわめく中、シャリアが舞台袖に消えたことを見取り、サンダースは再び声を上げる。

「御来場の皆様。実はア、この六号……。処女であります。なにせえ、このウインプルを御覧になってわかる通り、テイトス正教を信奉する聖職者を気取っていたのですからなア！」
ざわめきがドッと大きくなった。そのあと起きるのは、嘲笑めいた声と好色な視線の集中だ。多くの観客がいる前で暴露され、たまらずヴァージニアは耳まで赤くして観客席から顔を背けた。

「折角の聖処女でありますからア、皆様の目の前で盛大に散らしてもらいましょう！　そ

の処女貫通の御相手は、こちらなどうかでしようか御客様ッ!!」

——カカッ! ドカカッ! カッ! カッ!

蹄鉄がけたたましい音を立てる。黒いレザーのタイトなドレスを纏ったシヤリアをその背に乗せ、漆黒の巨体がステージに飛び出した。鬣も豊たかみかなそれは、舞台上で両前足を上げ、大きく嘶く。

「お前の為に、わざわざ良血馬を選んだのだ。サンダース様に感謝するがいい」

黒馬は亜人種の魔女の手綱捌きに従順に従い、ヴァージニアの傍に歩み寄った。

言葉もない。ただ絶句した。処女性交の相手が馬——。正常な思考などできるはずもなく、呆然と黒い馬体を見上げる。男達に組み伏せられたままのせいもあり、這い蹲った姿勢から見る馬の姿は一段と大きく見えた。

「な、なあ……冗談だろ……。いくら、なんでも、馬なんて、な……?」

すでにビアンカの豚交尾を見たあとだ。冗談でもなんでもないことは明白だった。しかし、冗談と思い込まなければ気が狂いかねない。馬のペニスの大きさはよく知っている。牝牡にかかわらず、西部では馬などビューマン並みに見かける。そのような環境だ、勃起した牡馬のペニスとて見たことがないわけではない。故に、そんなものを処女の穴に入れるなど狂気の沙汰としか思えなかった。

「それではア、名高き良血馬による種つけを御覧いただきましょうう! ヒャアーハッ!!」

「……!? や、やめるオッ! た、頼むから、後生だからアッ! やめ……ッ!!」

男達に引き起こされて、罪人のように馬体の傍へ無垢な身体を寄せるヴァージニア。女魔道師を乗せたままの、漆黒の毛艶も美しい馬は、大声で騒ぐ牝畜が近寄っても動じる様子を見せない。良血馬というだけあり、気性も落ち着いているのだろう。

「スペクトラムよ、交尾の時間だぞ。この数日、牝馬の中にいながら交尾を許されず鬱憤も溜まっているだろう。存分に吐き出すがいい」

馬の名前がそれなのか。スペクトラムと呼んだ馬の背から降り、シャリアはその鼻先に懐から取り出した小瓶を蓋を開けて近づける。濁った液体が少量入ったそれを嗅ぐなり、それまで大人しかった黒馬の目の色が変わった。目が血走ってギョロつき、急に落ち着きなく鼻を鳴らし始める。

「あ、ああ……! あああアッ!」

ヴァージニアの目の前で、馬腹の下からニョキニョキと伸び勃ってくるペニス。間近で見るとそれは、記憶で知っているものよりもずつと長く、自らの腕と変わらないほどの太さを持つていた。先端に穴の空いたエリンギ茸のような形に、黒々とした色艶。勃起したそれは、圧倒的な威圧感すら持つてピクピクと脈打っている。

「……口を使って濡らしたほうがいいぞ。このままでなど、易々と入るものではなからう」
 獣姦の生贄を取り押さえる男達が、ググッと力尽くで馬体の下に牝畜を潜り込ませた。

しゃがみ込んだ鼻先に、頼もしさすら感じてしまうほどに遅しく反り返った馬ペニスがヒクついている。触れていなくとも、それが放つ熱気が頬に感じられ、いかに熱く充血しているのかを覚えることができる。

「い、いやだアッ！ 馬となんて、できないッ、無理にきまつてるだろそんなのッ！」

「……ならば濡らしもせずそのまま、この巨大なものに貫かれるか。……やれ」

無慈悲な指示に従って、助手達は畜女を立ったまま前傾に上半身を折らせた。前屈し、尻を突き出した姿勢。馬の腹の下に置かれたヴァージニアの尻たぶを、黒馬のペニスの先がつつき回す。その勢いで処女穴を刺し貫いてしまうのではないか——。怖い考えが脳裏をよぎり、馬の発情の的となった女は恐怖に美貌を引き攣らせ、巨大な肉棒から逃れるように必死で身体を動かした。

「ジニー、お馬さんに意地悪しないでえ。こんなに可哀想だよ」

豚交尾の余韻に浸っていたはずのビアンカが、牝ヒューマンの尻と黒馬のペニスの間に身を置いていた。肉棒から逃れるのに必死になっているヴァージニアが気づかないうちに、人の形をした褐色の牝豚は、馬の腹の下に潜り込んでいたのだ。丸太のようなペニスを両手で扱き、さらには口に含み丹念に舐め回している。黒い巨木の上で唾液が塗り広げられ、妖しく禍々しい光沢を放つ。

「ビアンカ、何してるんだ……。なあ、ビアンカ……ッ！ ビアンカアッ!!」

叫びも空しい。一心不乱に馬のペニスをしゃぶり、愛でるように手で擦る畜女には、彼女の叫びも届いていないのだろう。

「ほおら、お馬さん、ジニーの中に入りたい入りたいって、こんなにピクピクしてるよ」
ピアンカの口戯のせいでだろうか。黒馬の生殖器は一段とその滾りを増しているようだ。ペニスだけではない、鼻息も相当に荒くなっている。カッ、カッ、と後ろ足が時折床を叩き、相当に昂っているだろうと感じ取れた。

「大丈夫、おつきいけど入るよ。最初は痛くても慣れだから。さあ、入れようねえ」
ペロリと舌なめずりする壊れた親友の顔が、股下越しの目に映る。

「やめるピアンカアッ!! おねッ、お願いッ! お願いだからやめて、やめさせてえ!!」
ポロポロと、いかな責めにも一度として流さなかつた涙が、堰を切ったように溢れて零れ落ちた。あの巨大なものに貫かれることへの恐怖、処女が獣に奪われる汚辱感、そしてなにより唯一無二の親友がそれを率先していることが、ヴァージニアに悲涙を流させた。

——にぢゅ、にぢゃ、ぬる、ぬるる……。

ピアンカの指が、サーモンの色艶をした肉襲を割り広げる。恥液が内股を伝ってしとどに垂れ落ちるほど濡れたそこは、潤滑には事欠くことはなさそうだった。露になった穢れ知らずの聖穴に馬根の先端が捻じ込まれる。

戦慄が走った。処女の薄膜に、異物が触れたのを感じたからだ。いよいよ美畜の顔から

は血の気が引き、唇がワナワナと震える。

「お、お願い、頼むから許し、許して……」

「お前もこれで一端の女になる。嬉しいだろう」

シャリアの手が上げられ、そして思いきり馬の尻に振り下ろされた。

——ドズンッ!!

「——ッ!! ——ッ!! あ、が、がッ、はッ……!!」

ビアンカの唾液、ヴァージニア自身の恥液。二種類の潤滑液を得て、長大なペニスに杭のように肉洞を貫く。処女貫通の証明たる鮮血が一筋、たらりと滴り落ちる。身体が木っ端微塵になるかのような衝撃と、女となった激痛。それらのショックで、一瞬白目を剥いて意識が飛んだ。だがすぐに、再度膣の奥を抉り返すように突き上げられた苦痛で意識が引き戻された。あまりのことに声も出ず、詰まった呻きが出るばかりだ。

「ほおら、入った。凄いよジニーのオマ○コ。裂けちゃいそうなくらい広がって、お馬さんのでっかいオチンチン食べてる。アハハッ」

恥裂が裂けるどころか、身体が真つ二つに張り裂けそうだった。異生物のペニスが自分の膣内で動き、粘膜と粘膜が擦れ合う。そのおぞましさに気が触れそうになる。

初めての異物に、新鮮な襞を備えた肉洞が雑巾を絞るような力で引き締まった。締まる膣肉がミチミチと、極太い性器に広げられて軋む。たとえ獣のペニスでも性器は本能のま

まに縮動し、牡馬の生殖器から種を搾り出そうと食欲に蠢く。

生殖衝動に突き動かされて、馬根に感じる牝の肉を抉る黒馬。やがて馬体がしつとりと汗を掻き、湿った熱気がヴァージニアの身体を包んだ。熱気に合わせて、ムッと立ち込めるように獣の匂いが発散され、美畜の鼻腔に満ちた。牡のフェロモンなのだろうか。交尾に荒くなる呼吸によって嗅覚に焼きつけられる獣臭は、彼女の脳髓をじんわりと痺れさせた。それは麻酔のように処女貫通の痛みを和らげていく。

「どうだ、気分は。それほど悪くなろう。お前の身体の中の微細ホムンクルスは全身の隅々に行き渡っている。多少の痛みはそのうちに快感になる、少し辛抱している」

惨酷な獣姦にも、女体は盛りを失うことはなく、むしろ一層の昂りを見せていた。膣の収縮に連動するように、子宮に走る切なさに似た官能。締めれば締めるほどに自らに返ってくる快感が、無限にループする快感の連鎖を生み出す。

その快感に、彼女の中に残った理性は酷く責め立てられていた。身体を改良されたせいだとはいえ、獣に犯される汚辱に悦を覚えている卑しい我が身。人としての尊厳を剥ぎ取られるような背徳感が、形なき銃弾となって心を撃ち抜く。

「あがッ！　ぐッ、はぐアッ！　お、おおッ、おおオーッ!!」

聖職の証——。聖衣の名残である頭巾が、馬の腹の下でゆらゆらと動いていた。乱雑で力強さを感じさせる挿入にガクガクと揺れる肢体。彼女のミルク色の肌や、黄金を溶かし

込んだように輝く金髪が、漆黒の馬体との対比で鮮やかに際立った。

遠慮や労りというものはない。野獣の本能のままに突き上げる馬の腰。巨大な生殖器が女の子宮口を力強くノックする。その度に牝の肉洞は収縮しながら肉汁を搾り出し、結合部の潤滑が増していく。多量な牝汁は馬根にピストンされるごとに、広がりきった結合部分からプシュプシュと飛沫を迸らせた。

——ブルルルッ！ ブルルルッ！ ブフフフッ！

黒馬が心地よさそうに鼻を鳴らして身体を震わせる。馬の欲望の捌け口。畜生を慰める肉道具。自らがそのようなものに貶められたことをうつつすらと自覚しつつ、膣に感じる獣の生殖器の熱さに腰を震わせた。

相手は馬だというのに、動物だというのに、女体はそれを嬉々として受け入れている。心では獣が体内に侵入していることを拒絶し、嫌悪していても、肉体がそれを打ち消してしまおうとしているかのように官能を昂らせていた。

(痛みが引いて……。こんな目に遭ってるのに、気持ちよくなってるのか……?)

初期の激痛のあと、どんどん引いていく痛感に代わり、肉体のみならず精神の部分からも淫快が湧き出し始める。まさに劣情。湧き出る快感は背徳を孕み、脳髓が痺れるような官能で牝を甚振る。

「あ？ あ？ お馬さんもうイキそう。お馬さんお馬さん。このでっかいタマタマから、

いっぱい、いっぱい精子搾り出すんだね。ジニーにたくさん種つけしてあげてねッ！」
 ビアンカの掌が黒馬の睾丸を擦り、そして張り飛ばす。掌一杯ほどの大きさの玉が立て
 続けに平手打ちを食らい、黒い馬体が戦慄いた。

——ぶびゅううううううッ!! どぼぼッ!! ごぶびゅびゅびゅッ!!

「ひいぎッ!? あおああおおおおおッ!! あおあああああッ!!」
 ドス、ドス、と膣道の奥の奥まで突き上げられる。その衝撃で子宮が拉げ、思考が何度
 となく閃光を放って弾けた。串刺しにする勢いで突き上げてくるペニス、膣奥を叩く度
 に激しい飛沫を上げて精液を排出する。まだ何者も穢していない子宮の中を、馬の精子が
 我が物顔で陵辱した。

胎の中で渦を巻く大量の汚液。その量たるや、ヴァージニアの白い腹がこんもりと膨れ
 て張るほどだった。初めて胎内に感じる熱い液汁の感触は、金髪の畜奴に背徳の絶頂をも
 たらす。牡馬との交尾、そして種つけ。背徳感が倍増させた異常な興奮がアクメの津波を
 呼び寄せる。魂が肉体から抜け出ていってしまいうような飛翔感に毛穴が一斉に開き、吸っ
 ただけで鼓動が速くなるような濃密な体臭とともに汗が噴出する。

(ああ……馬に犯されてイクなんて……。これじゃホントに家畜だ、あたし……)

膣内で、馬根が徐々に萎縮していくのを感じる。内側から身体が圧迫される感覚が薄れ
 いくとともに、逆に膨らんでいく穢れ、墮落した我が身を包む喪失感に美畜は絶望を味わ

う。

「さあ！ 六号がめでたく女になりましたところで、ここからは御客様の中からゲストを迎えてメインイベントへとなだれ込むとしましうう!! フハッフハッフハ!!」

黒馬スペクトラムが去ったあと、無毛の恥裂から白い絵の具のような馬精液を垂れ流して横たわったヴァージニア。潰れた蛙のように仰向けで転がった金髪の牝畜は、サンダースが司会進行している間にメインイベントと称する陵辱の為、その身を拘束されていた。

前屈し上半身を台の上に載せ、首、両手首を穴の空いた板を割ったような拘束具で束縛される。テーパーとギロチンの一部が合体したようなそれに囚われた乳畜を正面から見ると、巨大な胸の上に上半身が載っているようにすら見えた。

「……では！ いま指名した方々、こちらへどうぞ。ステージにお上がりください！」

ヴァージニアがまるで肉塊のように拘束され終えた頃、客席から選ばれた男がぞろぞろとステージへと上がってきた。身なりは様々だ。成金の匂いをプンプンさせた者もいれば、無法者のような者もいる。

「では、皆様には五つの穴の好きなどころを御賞味いただく……」

身動きの取れない乳畜の前に進み出たシャリアの手には、銀色とも灰色ともつかない色合いの粘液で満たされた瓶が持たされていた。見覚えのある粘液——それは、二人の畜女を破廉恥な肉体に変異させた魔葉だ。微細なホムンクルスが集まったものだというそれが、

いままたヴァージニアに使われようとしている。今度はどのような身体にされるのか。熾烈な猥姦から間もなく、疲労が残った思考では勘も働かず、ただ不安と失意の中で魔道師の動きを目で追うしかできなかった。

朗々と歌うような呪言の詠唱。手にした瓶から魔薬を垂らし、胴よりも大きい牝畜の著乳に落とす。垂らした粘液を指に絡めながら、ヴァージニアの火山口のような窪みを先端に持つニプルに丹念に塗り込んだ。

(なにを……するつもりだ……?)

ヌメリを伴った甘美な愛撫。乳首をクルクルと指先で転がし、ヌメリの指で摘み、ニユルニユルと扱われる。いまや彼女の最大の性感部であるそこを弄われ、乳首が蕩ける官能にヴァージニアははしたなくも鼻を鳴らして悦に入った。

「六号。お前はこれで完成だ……」

言葉とともに、シャリアの細い指がニプルの頭頂部を穿るように動いた。

——ずにゆう……。

「ひいッ!」

胸の中に異物が入り込むという予想だにしない事態。混乱と恐怖に身体をバタつかせる。しかし、両手と首を板枷に囚われた乳畜は、下半身を振らせる程度の抵抗しか見せられない。牝畜の悲鳴も無視して、魔女はさらにもう片方のニプルにも指を滑り込ませた。

——ぐにゅぶぶ……。

「か……はああああつ……」

柔らかく広がった二つの乳首の窄まりに、また一本、また一本と指が捻じ込まれる。直接肺を押し込まれるかのような圧迫感に、ヴァージニアは思わず吐息を漏らした。

広がった巨乳輪の中心部は、口の広い壺のような姿を見せている。窮屈ながら、両の壺口が左右三本ずつ指を呑み込み、乳首のしこり具合がそのまま縮まり具合となって指をきつく締め上げた。異常なその光景。目に映る、指を咥え込む異様な自身のニプルの姿。乳房の巨大化に合わせて肥大していたニプルが、その母乳放出口を広げて口一杯といった様相で指を頬張っていた。シャリアが指を動かす度に走る、神経を直接撫でられたような激しい快感。汗ばんだ肢体が跳ね、汗の飛沫が眩い魔光灯の光に輝いた。

指の束が乳口をほぐすようにツプツプと抜き挿しされる。挿してはニプルが乳肉に埋まっていき、抜いては蝟の口のように伸びて指に吸いつく。その様はまるで軟体動物が指にじやれついているようですらある。だがその単純な動きは、ヴァージニアに未知の感覚をもたらししていた。

これまでの搾乳とは異なる、逆流の感触。指先に乳口を浅く搔き回される度、甘い痺れがチクチクと乳腺をつつく。

「ん……ン……あ」

まさに性感を生み出す第二の性器と化した乳暈。壺口からトクリと乳汁を滴らせる様は、もはや本乳汁を漏らすヴァギナのデフォルメだった。

「に、乳腺が広がるのか……。乳を犯すのはさすがに初めてだが、ククク……」

「こういう気の強そうなのはマ○コにぶち込んで泣かせてやりたかったが、馬のあとの汚い穴ではハメる気になれんなあ」

「もうヤってもかまわんかね？ 早くぶち込みたくてウズウズしとるんだ」

「……御随意に」

言葉とともに、ニプルを弄る指が抜き取られる。それまでの広がりぶりが嘘のようにニプルはびつたりと口を閉じ、その拍子に母乳が水鉄砲のように噴き出した。淫靡な光景にゲスト達は生唾を飲み込み、股間をはちきれんばかりに膨らませる。そして、シヤリアが牝畜の前から退くや否や、男達は我先にと著乳に群がった。

「よおし、まずは私からだ！」

乳輪からこんもりと膨らんだ乳首。窄めた口のように大きく突き出した先端部に、男の硬く反り返ったペニスがあてがわれた。絶えず乳汁が滲み出しているそこを、赤黒い亀頭が弄う。すると濡れきった乳管口が恐るべき柔軟性を見せた。乳首の先端に穿たれた溝が、照り光る亀頭をジワジワと呑み込んでいく。

ヂュルヂュルと、母乳に濡れた乳口が亀頭をしゃぶるようにまとわりつき、男はただそ

れだけでも新鮮な快感を得て腰を震わせた。

「おお……こいつはイイ！ 中はもつと具合がいいのだろうか？」

「いッ、いやあああああああ!! やめ、やめてやめて、やめえええ!! あぐはッ!!」

——ズヌヌヌ……。

かつては凜としていた保安官の美貌が、いまは恐怖と汚辱に歪み、雨垂れのように絶えず零れる涙でぐしゃぐしゃに濡れている。必死に身体を振って慈悲を請うヴァージニアを無視し、男は穿るようにペニスを右の乳口に捻じ込んだ。少し押し潰されるようにして拉げたあと、乳腺の末端がムリムリと広げられ、柔らかい肉の中へと肉棒は埋められた。

胸の中に感じる熱い異物の侵入。乳肉が掻き分けられるような感触とともに、男根が乳輪の中心を貫く。苦痛が膨乳を責め、一瞬息が詰まる。

ニプルがペニスに犯されるといふ姿を目にし、ヴァージニアは頭を振って狂乱した。常識を超越したことが行われている。それも、自分の身体を中心として。発狂寸前だった。いまにも頭の中にある自分という存在が狂気に消し飛ばされてしまいうさだ。

「こっちもだ！」

——又ブウウウウ……。

「ひぐあああああああ!! あうつあ!! あ、あ、ああ、が、うぐあ……!!」

今度は左。先に挿入した男のモノよりも大きい男根が、ニプルにゆっくりと差し込まれ

る。双乳に侵入する異物感に乳畜は激しく困惑し、悲鳴とともに悦の声を漏らした。

ヴァージニアが氣遣われる様子など微塵もない。ただ男達は、乳姦牲畜といういま最も新しい肉玩具を使うことだけに心を奪われていた。

「こっ、これは、これは凄いぞ……。まったく新しい感触だッ！」

——にゅぽっにゅぽっ、にゅぶっにゅぶっ！

乳畜の豊満な乳房を犯すゲストが感じるそれは、膣と肛穴とも違う新鮮な刺激だった。乳性器の入り口となる乳口——ニプルが、そのしこり具合を高めるほどに、肉の輪が絞るようにして肉茎を抜く。乳口の奥に至れば、ぎゅうぎゅうに肉を詰め込んだ壺の中にペニスを差し込んだような感覚。乳肉が柔らかく男根を包み、まるで吸着するような密着感が全体を覆う。腰を動かせば、乳汁でほどよく滑る乳肉の中、無数の舌がみっちり吸いついているようなヌメる摩擦感が龟头を責める。

乳姦に興じる二人の男は夢中だった。すでに虜といってもいい。ワイン樽を抱えるように膨大な乳を両手で押さえつけ、乳肉に指を沈み込ませて鷲掴みにした。柔肉を捏ねるところで、その中にある自分のペニスに加えられる刺激に変化をつけて楽しむ。

(胸をオッ!? 乳ッ、犯されッ……!! こ、こんなッ、なんで、感じッ……るう!?)

乳腺が広げられ、膨乳の奥が攪拌される。臓腑を掻き回されるかのような感覚。乳穴を屹立した男根が出入りする度に、肛穴、性器、いかな性感帯も比べものにならない鮮烈な

快感が走った。

「ああぐうッ!! かはッ! あつはッ! ふうッ! ふうッ! ふんぐううううう!!」
胸の性器が生み出す快楽は、なによりも強く脳髓に信号を送ってくる。そこに苦痛や嫌悪を催させる信号は含まれない。ただ混じり気のない快悦だけが鮮明に快楽中枢に流れ込む。

鳥肌が立つ。知らず知らず、板枷の拘束を受けていない下半身が淫らにくねって踊っていた。ペリーダンスのように、大きく尻が円を描いて右へ左へと動く。その度に、獣姦の末に膣内射精された馬のスペルマがブビュ、と音を立てて噴いた。

「ジニー、すごいよオ……。おっぱい、ズボズボされて気持ちよさそう……。あッ!」
乳姦に悶えるヒューマンの牝を眺める褐色肌の牝豚。観客の目も憚らず、太いソーセイジのように屹立したニプルを抜き、黒々とした縮毛に彩られた牝穴を指で弄っていた。チヨコレート色の乳首を一扱きする度に母乳が噴き出し、宙に白い軌跡を描く。小柄な身体を蛇のようにくねらせる淫らな姿に、乳姦の順番を待つゲストが食指を伸ばそうと近づいた。

「……こちらはやることがあるので御遠慮願いたい」
手が伸びかけたところを、女魔道師が制す。股間のいきり勃つたものを持て余した男達は、至極不服そうな顔で立ちほだかる亜人を見つめる。しかし、触れれば怪我をしそうな

冷たい気迫に押されて、一言の文句も放たずにごすと乳姦の順番を待つ列に戻って行く。

ゲストが去ったあと、シャリアは周囲の出来事も気づかないほど自慰に耽るビアンカを見下ろした。普段感情の起伏がほとんど読み取れない魔女の顔に、薄く笑みが浮かぶ。と、不意に始まる呪言の詠唱。指先に蓄えた呪を持って褐色の畜女に歩み寄る。そして、その呪を自慰でカチカチにしこり勃ったニプルに放つ。

「ひぐッ!」

乳の尖りに走った異変。いまのいままで母乳を遊らせていたニプルから、一滴としてそれが出てこない。肉体の発情の度合いに合わせて母乳の量が増える膨乳は、すでにその瞬間から胸が張り始めていた。搾れど搾れど、ただの一滴として母乳は出てこず、みるみる風船のように胸が膨らんでいく。乳の酷い張りに苦悶しながら、ビアンカはその異変の根源である魔道師にすり寄る。

「お、おっぱい……苦しいッ、よ……。搾らせてえ……。おねがッ……。しますうッ!」
 「お前の胸に母乳を搾り出せないよう呪を仕込んだ。出したいのなら、このペニスのようなモノで、六号をイかせればいい。六号がイけばイクほど、母乳が出せるだろう」

シャリアが指し示す先で、乳姦に狂乱する恥畜の姿があった。胸の二つの乳性器には順番を待つ列ができています。しかし、膨乳にペニスが打ち込まれる度にくねり、躍動する下

半身はまったく触れられていない。馬精液で汚れた卑穴は、いまならば独占できる状態だった。

「ジニー、イかせれば……おっぱい、出る……？」

溜まりすぎた母乳で乳が破裂するのではないかと思うほど、パンパンに張った褐色の膨乳。切羽詰まったビアンカの問いに、狡猾な魔道師は頷く。その途端、褐色の牝畜は脱兎の如く転げるようにして駆け出した。

「ジニーいいイッ！ ボクッ、ボク、ジニーを犯しちゃうのッ！ おっぱいで犯すのッ！ いっぱい感じて、いっぱいイッてえ!! ボクにおっぱい出させてえッ!!」

ヴァージニアの朝露に濡れた白桃のように汗ばんだ美尻。さながら、獅子が獲物に躍りかかるような勢いで、搾乳の衝動に駆られたビアンカはそれに飛びついた。

小柄な美畜の体重の何割かを占めるほど、重々しく、莫大な褐色の膨乳。その突端にそり勃つニプルは、ペニスにも匹敵するほどに太く、長く怒張している。搾乳封じの呪を施されたそれは、むず痒さにも似た激しい疼きを発して、ビアンカの思考に犯せ、犯せと邪な囁きを投げかけていた。

「あぐッ！ ふんうッ！ ビ、ビアンカ？ な、なにッ、なに、なに……ッ！」

板枷に首を束縛されたヴァージニアに、下半身に取りついた親友が何をしようとしているのかをその目で確かめる術はない。ただ、言葉から推して知るのみだった。

「はぁッ、はぁッ！ ジニー、ジニー……！ いくよッ、いくよッ!!」

発情した犬を思わせる落ち着きのなさを見せながら、ビアンカは自らの右乳房を両手で掴み、乳畜の股ぐらに押しつけた。硬く膨れた、海鼠なまこのようなニプルが獣臭い汚液が湧き出す肉穴の入り口に触れる。

「なにをッ……!? やめ、や、ビアンカッ!! なにッ、なにか入って、くふううッ!?」

——又ニユルルル——ッ!!

膣に残った馬の汁を潤滑液として、勃起が滑るようにして肉洞に突き入れられる。獣のスペルマが、挿入された乳首に押されてプチユリと溢れ出し、褐色の乳肌伝い落ちた。

コリリとしたニプルを、身体全体を動かしてピストンさせる。乳首の持つ表面の微妙な凹凸が、動くほどに、馬汁でヌメった膣内を磨くように摩擦した。

性感を煽られたまま放っておかれた肉髪が、待ち望んだ異物の存在に打ち震えた。褐色の乳首を真綿のような柔軟さでキュッと締めつけてしまう。

膣には親友のニプルを挿入され、乳はペニスで犯される。前後から犯され、ヴァージニアは身体が穴だらけであるような錯覚を起こす。

「ボクの乳首気持ちいい!? 乳首をオチンチンみたいに突っ込まれて気持ちいいッ!?」

未だ馬根に貫かれた余韻が残る真新しい肉穴を、いま再び貫く異物が乳首であると知った時、乳畜を酩酊にも似た眩暈が襲った。乳房を男達の欲望の捌け口として犯されながら、

その一方でビアンカのいきり勃ったニプルに性器をも犯される。それは、いままでに受けた恥辱や汚辱といった感覚ではなかった。

「やめ、やめろ……！ ビアンカッ、ビアンカあ……！」

陵辱。もはや、親友ですら己の欲求を満たす為にヴァージニアの肉体を貪り、辱める側となつている。擬似ペニスと化したニプルが膣に甘美な摩擦を巻き起こしながら動く度に、親友の墮落と裏切りを痛感させた。

（お前まで……あたしを……）

上半身、下半身。満月のように白く丸々と肥大した胸の肉塊、獣に純潔を奪われて間もない性器。いかなる場所も犯される。全身が性器であるような倒錯した感覚に、精神も煮崩れていく。

「ああっうあッ！ ああ！ あああ……ッ！！ ビ、ビアンッ、カア……ッ！！」

頭の中では常軌を逸した醜行を嫌忌しているのだ。それにもかかわらず、すでに骨の髄までもシャリアの邪術に品種改良された牝畜の肉体は、より一層燃え盛るように発情の度合いを昂らせていく。

顔こそ見ることはできなかつたが、忙しなく粘膜を擦るニプルが一段と膨らみ上がったことを膣に感じ、ビアンカもその劣情を高揚させていることを覚つた。

——ブチュチュッ、チュボッチュボッ！！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>